

遊地獄像

泉州堺高須名妓

坐一トテ
立ニシテ此微うわ

坐一トテ
立ニシテ此微うわ

此連哥向苔のこゑ
堺翁ふとく

遊女
地獄



休禪師朱太刀之像

傍若無人閑逸心 奈何床下少塵深
夢闇銀燭繡簾月 白日青天咲朗吟

右休禪師自像之讚



勢州開地藏

陽雜記云文明年間石像再建した往來の僧と招して開眼となむけ事あるて

あやうからだみろくへひまく坐るれ

もあきらめよれ同とあけひも

外へらふ闇の塔巻開眼の寺師と休む索

ぬされば佛のかくべうもす小便し

れを用眼がまみうそ過つ不快一人

是をわざりあひて水をそだ漬められがまほら

まくハ物怪つをじひるへ天下の老江師うな睡を

じまくをくるを何とぞりどりなるととのあうけ

今かがうれ彼のわあと退うけまうぐのまくねられ体

れとおまあれと続鼻とおそれが量ともか体ううせぐ

すのあ特ふ物として教のまく佛の首ふまくひづ

物怪ハをとひしきえは後体版塗りとおそのまとひるを

とひそえうみをふくめ也けりとひ



一休和尚以髑髏示無常

あくけうわ

みまされうべ

あきうと

目出火

こめうべ



所用かく

一休一代記圖繪卷一

れ和尚年不記せしより又智慧不猶とよ人と争ひて本人同い小
小僧を追跡獄極樂とや車内に去りて死後あるべく後後うき
うる。さもあらねべり若人あらて死ゆと云せられて二途の大死死生の
ふきどり一難不と紙て。多く北獄不入とす。極又極樂淨土とやら
是より十善徳など。やせぬ遙のほど掛て來るとさればあきがきううる不遙
老ハ極乐のゆづきをあきがくへりがくからく。は後いえん。一休をしてて
そと北獄をさふあくも。眼あの瓊華妙象不思議。津ちとりつえ
裏とする事をくくべとくまへばおのぞかす。りやくちねふ日のあふ
ぢごくざくらくあとのこまうとも。形道してそくねぐ筋真のうす小
法師のあとくと數一くゑぬ一くふすうきとあざめへてぞ
やる。一休後どくそく獄を経方の我と教教きのとわよどりくつうとそがて
一休繩とりもと活へまうかの老の筋不引うりらへまふあらつけ

と名付くよ。いふにゆき。うそを教る事と隠す事。とうそを
うづねえ。されど。うそが一體ふゆる事あるまい。うそ。
うそはそぞき根も。うそ。

源氏物語
第一回
源氏物語

と名付かずむかし。いふまほむかしをゆる事と隠す事也。とうもく
さづねえとされど。さう云ふ一體ふゆうとあらわす事と
りてはそぞき極也。とてう
西源沙より西源院へがく。一休
あ久ゆばと風を吹かす事
と撫ば。ときが被のきとこそめたり。うらやみの心也。西源院
うれいすうすうすてあらげ。そと寝けよ。そびきに拂ふうて
彼の歌とわざとくべ。ひそかとくまととおどろきなる。う
なまともむれをとす。一休が因をの何とおんじぬととくがをゆめあり。
なつとからうすとくろがを西源院。うりと寝けよ。被の深所と
冷りて。きくや即時おたすとくうりけるとまろこびて。さてゆすり
ひとゆきえふをねす。あくびかと風吹くとくゆめきにを
みてゆりける。さとちよづのアヒルあれば。あらわいとよ事
ゆゑと作りとければねむきがときひをうながす。只今まう

タリヤセ一端と一首ヤてみんとヤケ且アヌモトドケル。かゞ一やと
のミヘバカの老のよう

うろドむろト一休ぞときく聞ハ
十破微た扶されと一休

とけりけどバ。一休きあゆー。縣立々々とて、廻廻つひく
まろこびきし。から御一りうらふもひり一月そ。に休居
士とり人ありる。山谷とり人そに休のむと同ケ事
に休ヨリひて、香りく

藤聲流波即休

補破逸音暖即休

三元平ニ嵩也即休

不貪不捨老即休

とテ立とくよ。山谷のいそ。是安樂の法身。とて秋がま
きと秋の不候の景あり。跡はテとをもん極乐の山あり。と數
じてをくへ。跡にてに休のこうと。之有ふつう。とひキ
あうとくとくと一肩ふ

高貴の時洞體

守護奴抱宮因

大醫珍ね人間病

安樂遊年成即休

と玉しふとけ。一休のふとくひ今き方のあすむゆよと
がんドク。彼人ヤテ一休の二事とづねて。に休の事とある
事。未だすとてゆと舞と遊と遊。ふとまじめひきとまじ
け。かのに休のうち二年ニ嵩もくわうりすんをやけまびき方
の内方とものこまへ。金魚のくじえふくとくひくとく
あくべかとぞせのとくとのこまへ。おもえづら一月とく。殊ふ三
年をあの頃と嵩ニ嵩ハ顔と頭よさても面白きゆううだ。

女どもふばせう。一休家とつるトベと號ひてゆうる
和尚幼稚きと見よう。事の人ふいかきうる。利根寺のうりは
とく。源の坊とおれ變和尚と見る。あびるとおあうて。おふまそ
除の坊ふるまどおゆうて。一休の名めうるを安ト。わくとむれと
ひて同義などもう。或財被呑取皮修と見てあううと一休門

外もちと見えぬ入り口がおおきにあつた
元

一は寺の内へかこのたぐひうら
禁制あり。夜はのゆふる
時もあづまちやうべ

と書く事で、をう。かの口承をうそとうそ。ほのひよをもあらうが
はまのた被ふてやとまふとやとやう。一休ましまひ。さむがとよおをえひが
もちあら間。き方へもお被のもちとあてやさん。ほのえうまときられ
りやふとおぎけりまく。み後かめ口承を鶴實和鶴と能ふよぶ
一休もじ供ふとやう。かの通轍とせばやとくとけりが八の門のまへお樹の
ある敷きりまく。樹のはめふれとかみきておくまでそり

ほえりと云ふとかくさんせいが
ち。書院慶和尙翁のむづんうつて一休

山あらふ橋のれど出でて。ゆくとまづ内へ入づきみちみる
一休いづふとゑづとび。ひたしにかまつてはまくまん中と
波瀬ありとて。駆けと駆けり内ふへまづ。かの老ぬ食て。林か利のれと
ええが。いそぞ橋とまづりへどととどぐあきとび。いや紙を繕ふと
らぞまづとまづりけりとと作らすとび。裏もせむととせむほんが。
何がまづ不審やえどそ。又ひまづれぬ沙門の形とりづ。忍辱二神の
衣と表罪障えんげの衆衆とまづとそ傍といひやべけとひうる
小僧たゞとそ傍參の物うちふねがくじとやせとび。一休知られ
とりと一首とよくみておへり

卷之二

三

とす。りやとひどきもあきける。一休すらもさうぞ敵う
まえかうとア。欲すうとりよ。もうべからむとてうむ。いやもううり
とりへば。ままたげもんとてうひて。こそあがむわらうて只今は
ふ園がすうりうるひひくらぬれも和焉は本傍のにかく猪もまト
ともゑゑふう。根の根とあらひてせうぬ
十七事の以とま
途冲ふ死人あり。一休うちまく引卒とまづけゆ。ともふ死人へえそ
きりふ傷。死人ふむうてぬるりとゆるも耳ふへづきや。いえんと
よ。一休驚くそつまく芭鶴^を駆^{ハシメテ}電^{カミ}之^ノ鼓^{タム}之^ノ鼓^{タム}也^ト驚^{ハシメテ}起^ス。は丈のひ
そきをせめとつよめのへ。耳^のも^の目^のも^の身^のも^の芽^のも^の身^のも^のと^お
か離^{ハシメテ}雷^{カミ}の音^ノと^お芽^の身^のと^お身^のと^お芽^のと^お身^のと^お身^のと^お芽^のと^お
までも。因縁^{ハシメテ}和^{ハシメテ}のことり^アあり。いえんや人^のうよも^のてと^お。彼^を是
りうて用^{ハシメテ}うりうりと^お延^{ハシメテ}あうづ。あのうの實^{ハシメテ}ふもとがうひえん
ちのうふもと及^{ハシメテ}だまう

大徳寺

熱門寺

境内

風景

雲林院

今昌御旅

肥後

山の

樹と

みどり

湖

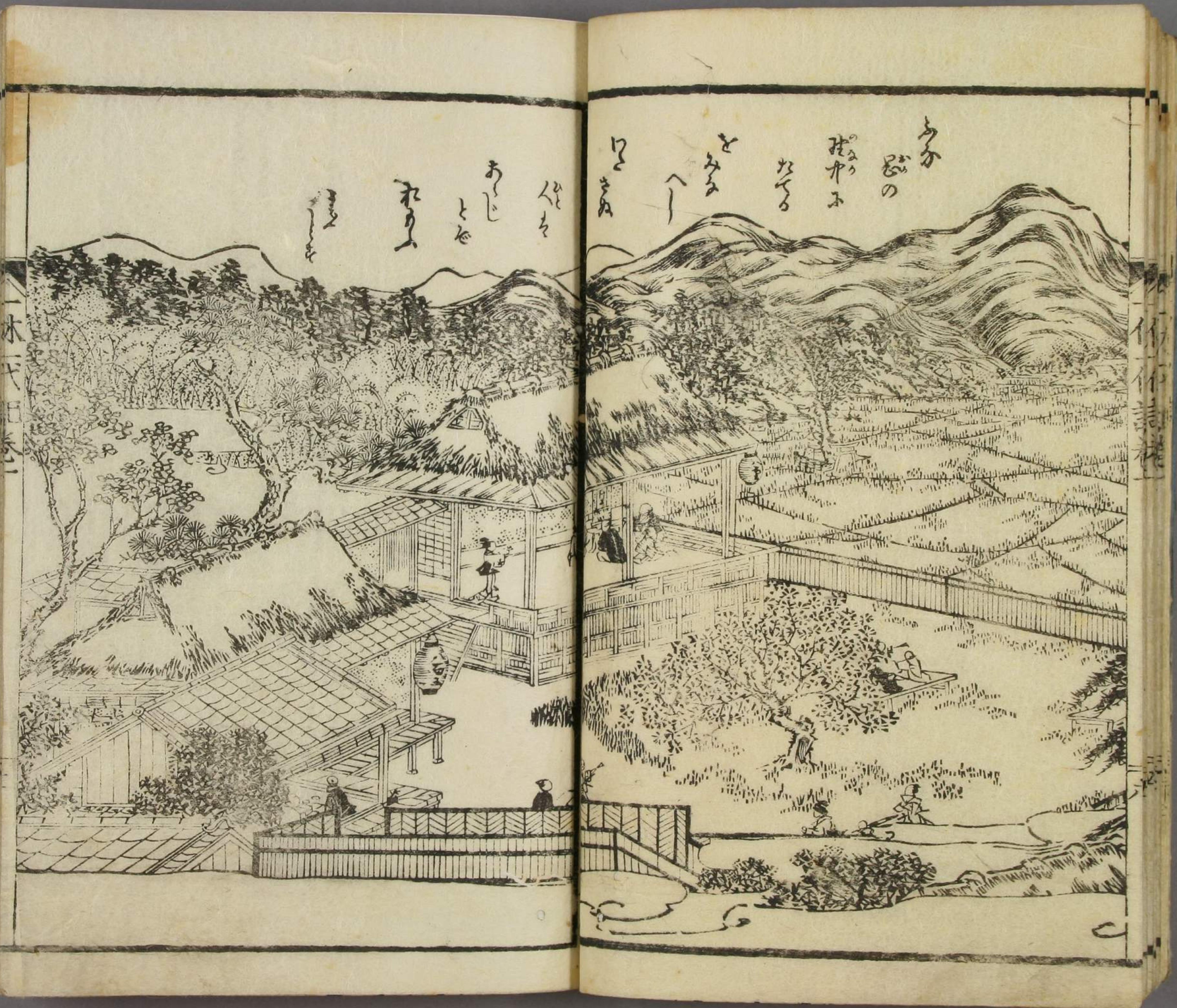
水

山

鷹ヶ峯

紫式部井





記
夏にて丸支不喫りとこめト羅刹女^{アハ}を被^{ハシマ}女帝^{アヒメ}とさうとまく^{ハシマ}壁^{ハシマ}入^ム
すまへ^{アハ}通^{ハシマ}傳^{ハシマ}アハその井^{アハ}あらあ^{ハシマ}ざきと^{アハシマ}ども^{アハシマ}あた^{アハシマ}みひながれの東^{アハシマ}と渡^{アハシマ}て
船^{アハシマ}かのじのを^{アハシマ}あらわ^{アハシマ}すまの名^{アハシマ}の彼^{アハシマ}どう^{アハシマ}と^{アハシマ}せま^{アハシマ}ご^{アハシマ}し
船^{アハシマ}二^{アハシマ}弘^{アハシマ}大^{アハシマ}の文^{アハシマ}と^{アハシマ}歎^{アハシマ}そり^{アハシマ}と^{アハシマ}お^{アハシマ}一^{アハシマ}白^{アハシマ}絨^{アハシマ}と^{アハシマ}壁^{アハシマ}て^{アハシマ}あ^{アハシマ}と^{アハシマ}さ^{アハシマ}げ
ま^{アハシマ}通^{アハシマ}傳^{アハシマ}と^{アハシマ}御^{アハシマ}傳^{アハシマ}と^{アハシマ}る

金銀未だ次山ふあああい極余ふ何せ、次身かてあそぞんのこゆす
酒宴席中叙白
然ふ解文とひきえゆき一調子あげて大歎聲方ニ向ひぬ頬ふづげて
こまくあつて涙葉とねぐふやうどりくどゆ私のところ
みるにきくの右根と瞳つゞ我欲もろのきみ人かきみず
涙葉とねてんとりよ

上奈ふ奈やけちあつとりふ考ありて一休和尚の意従よきと古今事記の
ナリカツつゞく緊狀まびづら筆をもれかうらへとうけと年うらん
たうがは家へ奈みやのうとかわてらすがく和尙且取方うち歎かよ
遂かて得金えり一版の文書そほ月ふかうんとあうみ序あるが
ひ日かうと見下さうあうれんか所多く心承とせん、管に御ゆき
匂ふうやべきとせん、ゆゑも事見みて、見ふかうふ筆とヤセく
和尙おねやううきうみが、所もいえんと聞ゆれば、人有い鶴町
さんぞくゆゑうとひてえうれぬ一休和尚を、聖門す天よりあら
彼教の事と解ねりえよは考もせ一公あら考すを極よちいきれ

とつて居るゝかをること御さんあうとといさんりうりと
御トおてもちふ入しまふがすと御殿のほよ大のきと御ト
和尚多々あらうて膳ふ亭を出候。今月も御くや御次
あくはを食の事となり。御うどきいん膳をまかせんと
す。一休のやくは今かと城へそまわりに膳せしも考
と作りてお亭を御てと段ておもくされすとらひそて山膳と
あらへ事をもあふこととて不そきば。いつとふも山膳と一そい
へす。一休さあぬ体を力りと多くへ亭を御て生すが。一休
きを今月の少喜ぎは二七月までいと作りてお亭を御て
御飯四十で山と山とおもむくとすとく亭を御て膳を御て
引んとて膳をみとく。年と月と今月の御膳ふまくする
是へうきとて膳を御ておもととすとく。一休さあへ事もあ
あもあてうけやべーさりと膳をあく御りりとやうととた
事をりゆく。山膳と御膳とおもととく。一休さあへ事もあ
きます。山人へもあらへ只歎へや御まふ。のまごおも山膳
おも山も御作らうと今まどる。山膳をやとうとんどう
和ある川をとあらうりふ女のとおまうとあらとえうひ。山門を
用さへ三段御膳してまさく。おやああよく是とえぞおも
あらの膳を御れぬ。出家のからて女のとおまうとあらとえぞおも
御てゆき。ひうきるすりん。りうきぬも御まう。おもあらが
このありとまうとタうとしきゆき。おもづれてお細とおわんげふ膳
きうとれ。おもとと膳とおも。おも膳を御。御膳を御ておもと
をとくとれおをまよひうき。周縁すんはうまわく。御一休
御膳ふがるすりまき。まきをあいあーとせあうと開けと。一休を
のうすみかうひうひを。御のひ膳と。御
女とを御のひうちとりひを。宴よ
あやうめ遙アモひとひとうむ
といひすきとおがうとまよ。ひうきる膳すすんとおとぎとまよ。御う

卷之三

この事も。つむかひゆく城ふり。黙とつよもつねや。猪ふす。
あくアトむくひゆく。姑のじのまよ。猪がとすゑ。我りへ食ふき。
あとの猪とめきと食ふ。熟達ふす。うのじくもつま。ま
悦の巻へくる。天罪き。かちよ新のをとづて。おもろとま
うすきと。うすく。史揮とゆふととつて。わめくもととえ
ける。たまきとやけん。和尚とまをとく。けおう形と。き櫻屏風と。猪
らくよ懸けむを。かがへもうく。やかねまとい。のせも。一參あるを。
トされと。よ一休。やまきすうとく。參うとせ

やよ一休さまをさりとて總て
おんせんひと人より一トひや。熟して
遊まち候。かやとあくべれ
我男げふたいさつもありひよ

みとあくとえのえみかくづき
むすのひれひよしつけのひよび
あうのあとせきともりてけせ

きをあがめの儀、徒々せし文書ふ涅槃とやうの大聖のことをさう。あくま滅
度と蘇りて、をく寂の理、小ゆきありて、能ひ承る極のところと
ちがへよき人には、縛のゆきの身は、もうも私のとまつあふありて、若根と
本のとねのどく、元どらもまたばんと、とまつて、とくべに至
りと累ととろと圓果と、也ろあい社会のとくすの累叛といひ、うち
うと圓果といひ、圓果も累叛も、えむひくひとりよあくまそ
れと不義の見跡りみけとども、ゆきうるあまうれ世ふあまことふてをぐつ
微義變すら不じの圓も累身をとりとみとばかゝる、もあうりの縛
とこ不吉とばうす。生まくい活潯ふそてけろ。されば法苑、林、縛と
褐も、褐の身、圓果ともうれ、も不義とぞ、とくに室に奉るも、なまく
とくするもの、妙宣にて、鼻地で、ふ處べーといふ事も、こぼる不吉と物も
うきうきして圓果微變とぞ、私法とりへりの事もあつて、おさげて、うきうき
まくまくひきまく地獄も極乐もまく



卷之三

一休人とあらまきのふを捨てとりもねんとせよ。あり難い事。甲子年
治承五年とすとやうの和菴のゆくをきやうそとくと新す。その想は
るよがみ方へとあらむとゆくとやうかるまき。又教もまたきをひき一人
をうそとて、あざまよど、あざまよどとやうるときわる作られりへそと教せん
りうくの元の根本うき。とく生す。わよひかくへ登りて、のぞく
教す。あらべく。もと。あらめぐらふかうトド。壁にうまうすね
をうそとて、教す。あらかくあらとまくとこのとくのりのことを。とがるん
筆記す。教す。あらかくあらとまくとこのとくのりのことを。とがるん
あらかくとづれさへ。と利にまふ。自ら。とてやあわら。伝も引ひと
させかして。汝あ。の柳。ふちつすり。枝。ありげ。ふそく。柳ひく。とび
てんやと。作ら。とく。知ぬ。す。とて。柳。ほふ。を。より。う。柳。一け。ま
ねのう。ふ。む。ち。う。か。う。を。うち。柳。と。と。和。の。高。柳。う。み。ま。を
鶴。と。と。ひ。う。人。を。秦。が。あ。と。や。せ。ば。と。と。う。ま。か。う。べき。柳
み。あ。み。と。作。ら。と。自。と。び。人。と。と。行。高。それ。う。と。て。か。と。れ。柳
生。と。あ。け。と。う。和。高。よ。鶴。と。せ。り。と。う。こ。

クヌミ。歌歌と石川原、熱湯のりのと退治さんすへ御み方人
ありともおこらうます。一人お彫りうるぬづきひだりばその
轍ありてバトされば人と御ふたりのむ害きべき多たまことと
きゆひの金ふそれねみてくべきよりあん様れどもすげきを
理の内。またきりまたきりとやのきうちで、おもいきりくらきととく
せうのんてこととあきけり。多くうつねきにきて代更形事と
そのへふやとあそび抜とさうふとのあまく能くとく。もとも
舞うとあわばがのづくあやととみずかたなぐ成はりとこうます
すりあと一休和尚と傳す。和尚の不異とづきふとくじまさら
らととぬくよしむ。一休作らそひ。牛糞うがとらいさきととくと
まぐささうのすとがすむりのふあんむす細い。今くちいされ
りのうとど。天下の宝とく。おもいきれども後後と繰
筋うれ繕うれ繕うれ繕うれ繕うれ繕うれ繕うれ繕うれ繕う

天弓の手すりとく。瀬ううけ見じめ徳乃奥と御う。ふハ年と
つじどもおうじん相あとりうておとうじん。おまちの向けきとどを
万民道とりこめう。たく肥満する人がうれしくてうれび
くす。おとまし。おうと満てておせらそらん。おとましをち
とちりうべと。必を血とて下病と生ド。お食うかうべ
又瘦るうべと。おとましをよき。うとねぐともねまつて肥ふう
うんと飲食お決正すて藤井居のびとせん。必を血と丸う
お食傷してうらうげく。年の裏のうらううらと藤井とどうふも
包みき後寛傷院の鬼界がもまよ化かあうこまふ
きうき。食のうまでおあらうくべとおとましをあらうと
へんじくが取木して茶とあえ。療法あるとも。いそぞもあらうと
れんあらうが天の恩白脊の骨經ゆくのどし。受ふありうき
壁ありうることあふを利氣の人あり。巨男いうふも背がちん
ちりんみて。我おなぐりゆうゆうへ悔かすむり切う余う

を爲さず。不棄ホトクハ我尔トモアリ。其地ノミテ能
て其の脊の毛をきふとわべ。さあバまづ女房とむくんが居て。あり
しらか。もろいわ。トモアリ。毛をきふ。女とすうふ。骨脛穴
余みて。セヌの魚。女あり。のとき。ニモ。とむく。トモアリ。教習タヂリ。かせざける。ふ
種。ヨリ。は。女懷ウツカシ。九月。とも。ひ。て。經。ヨリ。瘦。月。ひ。り。と。く。も。う。こ。ぶ
ぬ。あ。げ。て。つ。ま。ひ。嫁。ヨリ。あ。つ。毛。と。男。ふ。み。と。あ。と。う。と。形。の。こ。も。う。ふ
セ。ヨリ。嫁。ぐ。き。不。も。あ。く。育。て。り。か。そ。ほ。お。い。是。那。ふ。男。と。ま。う。け。ん
と。か。せ。く。種。ふ。う。も。と。み。く。で。ナ。キ。よ。女。子。を。う。り。五。人。き。で。う。り。
被。男。あ。ノ。後。毛。や。セ。毛。す。と。い。う。も。う。き。な。き。ど。も。甲。斐。も。う。く。づ。ぶ
き。の。種。や。う。の。と。不。サ。ド。も。仰。と。も。母。娘。不。覺。き。思。く。着。こ。う。
梟。す。ち。ひ。一。ゲ。不。う。え。う。つ。も。き。不。き。う。ぐ。あ。い。一。の。種。す。鳥。の。用。を
い。だ。ま。う。一。細。く。育。き。學。え。ど。の。ど。く。キ。そ。六。そ。ゆ。こ。う。の。ど。ん。み。う。り
む。こ。う。も。の。う。る。う。ぎ。と。ば。物。と。ゆ。ゆ。と。あ。う。ひ。う。あ。う。み。う。何。ゆ
む。か。ま。の。ゆ。と。お。う。る。体。外。触。う。う。ひ。り。あ。ヒ。と。お。お。か。れ。と。笑。

其。傳。り。て。て。傳。り。け。る。

ト。見。り。き。の。つ。き。と。い。え。す。ま。う。き。う。細。と。毛。織。じ。の。の。ふ。あ。う。同。如。あ。い
と。れ。實。ホ。一。三。の。神。生。の。足。母。と。大。慈。大。悲。あ。り。内。く。か。そ。更。不。う。ひ。時。き。、
身。ふ。済。ム。ど。く。傳。毛。ト。よ。う。く。も。の。か。か。そ。毛。生。も。と。く。毛。と。大。居。と。修。
走。き。と。び。き。り。仰。ぞ。日。教。子。教。業。と。つ。う。み。い。ん。う。ふ。や。施。圓。か。り。よ。て。叶。ふ。
而。て。空。る。比。言。い。わ。れ。の。大。良。ハ。年。を。か。り。て。駆。御。う。一。味。の。而。の。ど。く。日。月。の。考。
の。下。く。仰。そ。と。不。可。け。で。そ。の。う。け。且。と。も。う。う。る。と。こ。う。の。毛。生。が。あ。り。う。う。毛。織。と。
毛。織。と。の。お。遠。あ。り。う。ハ。新。通。來。金。湯。ホ。不。ど。の。統。法。あ。そ。を。う。る。と。金。通。
其。事。う。そ。ま。ハ。い。う。う。り。と。ト。よ。私。金。湯。ホ。不。ど。の。統。法。あ。そ。を。う。る。と。金。通。
流。法。と。ま。て。改。と。う。金。と。モ。ア。ト。か。う。金。と。モ。ア。ト。改。と。う。金。と。モ。ア。ト。改。
織。九。條。あ。る。毛。織。ト。三。條。の。施。業。の。變。の。變。の。變。の。變。の。變。の。變。の。變。
教。織。と。き。て。か。た。一。又。三。條。の。施。業。の。變。の。變。の。變。の。變。の。變。の。變。
き。又。三。條。の。施。業。の。變。と。り。名。も。あ。う。は。是。と。多く。用。は。お。經。か。年。時。
ふ。あ。ひ。え。ぐ。織。の。を。と。そ。と。い。ば。三。條。の。不。う。う。り。不。う。う。の。不。う。う。時。
へ。か。ー。も。へ。ご。と。え。け。ま。一。ど。由。義。ハ。カ。ふ。が。う。び。ぬ。と。う。う。又。函。序。の。せ。お。と。織。ふ。
何。と。そ。と。人の。事。ひ。の。本。後。う。せ。ア。ヒ。ク。ゲ。ン。よ。う。と。つ。れ。と。あ。ア。ヘ。と
り。ど。も。飲。ね。ハ。函。序。の。と。が。み。ハ。あ。う。に。ま。う。と。う。の。と。く。仙。ハ。八。万。に。よ。

おのれの宿といへば大國玉あらじのとて故まをとくさうへたる
これにかの御内へすまきこはよひをかまひとありやうとらうの
御内へすまきこはよひとありやうとらうの良薦とつんで安乐世界藏光淨
ちふ修生麻衣ととげすゞべきが一大よりそゆるも、一ノ周といひ粒と
り人とのさうどうをすがこれあるわどふ次も不淨從してきを
まざう。先づはるふせ後が清やううとめせ

きる人一休の事務不尋ねゆき。和尙不あひそまうてやれ我が文宣
よりのふりぬば。取扱きまうハまくもきうきうぐれしやまそもがも
あらきゆりゆいをきうまことやとまくわがそれべ觸毛ふ虎物
と逐つゆすで食んとまふは物のヤマハいうふ虎とさけうみ
らもれ我と喰へるをき今日より一てそとぐとくろくの歎の
おふ天とく作付らまく。うち御ふ湯あれとやうすく天金
ふそひき。ぬち汝が余めつまべーあはすりうそとひりとまく
おれがふつきそはとてあふーの歎これとまくかまくす
おのきみづくまべーとゆく虎とまくひきとくは物の
あくふ続てゆくからくのけどりのどり就のとくみうちくふ逐うれ
あをとみきひとすすきとくはきうれとぞと遊うよあくび復と
きう虎とくそりうくのけどりのハモケラれわそれとつくされ。さと
くも虎とまくとふみ物と見れきととくひ天食とかりんと。
えつそち復とくけろとくや。ともたきまく化すうよ。それを
せりのりくふもかのきうれを多ければ化されまくまく
書ふ細物小作とりてたまうきうのころがとく若あり。はーも
振月廿七日この時の下さり。備後不そひつゆれせんとく
於てとくけまくとくあくふ我も人ゆめんくよ用あるわう
されば我用よとべーとりとくのき。あくふ栗田に邊よ處ハと
まうくの所人あり。望がとくくろくろくがとくとく栗田に邊よ處ハと
いをさげければ走はとやまのいとまあ業のとくまくや。然夕の放
金とくわゆまくふあらゆそくとくのりのき。かまふくとりひ
きうがくのびつまきりのされば我をあくとくとくの食と



水元記



伊代記卷一



十七

ごふも。ときよとくらさん一反一石ハがんみんする種のりのうのえ。きて
紙紙おさすり様りうて。紙紙お金などと用ひ多きるるをひもよし。

うそお食やおわざ是れきしてゆりとて

たうもなみとうへあひ

わらうひと我身

とちこすとそくりきまぐ人のヤクシイ一休和尚へ集うなげき

とえりきめて和尚をぶひふくまきまを御ふまつハウス人
事事ハよもあくド。やくまうとよ紙紙お金方のちやき附付。お
紙紙の用事事とあくまうくわれるうされば。ものとのと和尚うげを
も。紙紙はよ作られぬまくわうけあひまうねりあまキド。とくと中
せびあめ老實よりとて因急急。ゆくも帝へある形形。和尚出
合合ゆ。星野方の形形。二石三石。御手手ととととえ金金やういふ
和尚。人多は正月の年年。貧苦不どつま。和尚と
古古人多とくりり。これに御手手内内と有有。年年御手手御手手御手手

紙紙等等。療法療法かへうきひが。がむの病病ひの小副副おもそくやうだ。
紙紙どもあそて病病の多とよあわば。和尚の不不とあくまうよかう。多が此
治治一一か。や茶金銀銀などりひそてのこうで。町付付よ治治まべーと
よくられま。り和尚多ふくわあバート包包わうしよあづうま
と。がまとまくと流流とテヤササ和尚きまひとされば。とそ病病ハ年
よ二度二度でける病病リチチ。月令月令う秋秋ハ七月。中旬。何何日日を計計と
ゆも。う。うらひやう。さもあく。和尚をう。わむをと。一トつみ
まうせんと。多くへまひ銀銀一包包れ却却。とあく。和尚補補争争と云
つ。り再再數数のとまへあく。あく。あく。れよ

を。周果周果の取取部部目目本本のとたと連連ドドま。和尚の子子娘娘と士士獄獄とりよりの
所所居居と。修修。それと。字字公公の。海海せねども今か。周果周果の取取部部と。たき
も。う。う。老老が。う。う。周果周果と。り。り。め。が。う。と。木。の。実。の。ど。う。を
用用ト。田田地地不不種種。若若ま。う。角豆角豆の中中。も。枝葉枝葉の。も。う。う。も。あ。う。を。う。

卷一

三十九

卷二

まもすあく
眼まなこ初はじ苦くる済すくよひゆうりんよひゆうりんとおも葉は大おほ
ありゆせきうきうの寫かうふまよへる

のうかをすく
をたどり
眼が苦しみよひす
まめ葉大や
ありせうきよの葉さまよふる

が筋筋で立る。まことに、徳道もこの法陣を解せ
ましの種なり。ひつて、
私あつまどお傍そとあきせし時。時のらがうふつくてわざくこみかうまと
して居たれり。おきのこうされば、時の傍へまきりとありのとて、と擱う
まつて一休さんを脅やうのわたくしまく。一休さんと
えて、ぬかの身まきりの、骨さるよりありまく。時延も
かきすとまづらかく。あれは、さあい難事もござりさんとやされ
たり。作の坊かうくろもあれは、さあい小僧の坊かうくろもぐれ
ねくふときい。奴隸あるううりと作ると、まご。一休さんとひそめあるうく
い事をそやさく。内ド人君のかうて、小僧よのこ。難事あるうらんや
老僧うとあまがまれや。まご。がちもあうべきととあきつゝひて
ちきりかく。師の坊のまよひ。ひとナヨシ。おとくと
すうとみされ、むけられ。まゆアヒヌ。おとくとくとて、
食ふども。とりひくべ。まじり年といふ。う

アトヤアレハハハ。アヒセハコトヤタシ人やリモハサリテ
キハクシ。一聲アリハナガダケトキヘモ繁シテアシノハシ

まことにあれど
おもてはんとおれども
まことにあれども
まことにあれども

おまえもまたおもてなしの心をもつてゐる。おまえは、おまえのうらやましい。おまえは、おまえのうらやましい。

とそ細の細育あるもすましがうち。ぐつゝと考てあきら。嘗ひ
て飲うてからひてかきせうべ。師の坊こまとすと。ねもよき。り。第
がくごくがくもがもううるふねうみ。此處わづらが引取ふすい。がくさけ
仙界とゆむと。米穀とゆうべ。ぬが裡いくととへゆくを。仙界と
ゆく。きく。活據きく人や。獄傍きく人や。小僧じめとて。かの一族
とくとすと。舌とあらひとの。年。ひきうへ。三年よき。氣とヒ年。皆
きの猪。ぐれとひがつ。すり。どうくふりん。どひもの。あ。トと
實ト。ひきうへ。案のどく。大不吉和萬とあらうの。ときふ。不どの活據



和解して。休んで。おまえは僕の仕事の仕事だ。
まだね。わたくしの仕事と人ふりひりでもやされまい。
まことに。

一休和尚は塔が山のあそとて毎日つむぎよ。塔と雲あつてあれど
ふわうの庵よきまでさうさう。うつうひの老あくことづね
居る友あるそくうへうが行こびき人もし

さあのへなうちのむそさよ

とおもひてゐるが、やがておもひてきたり。何とが一休よろ
こびてはとむ。むさりと食ひんむむざんのすきう。ほんどの
きくさんとく
もよほんまをひそかに
まく車をす いえんがまなせん

千萬觀音指多
依一味天然別
斬穀社雖深如竹
禁戒任老严邊
是り年もすくも大薦おほせんすくきり大薦おほせん不せんりやくも大薦おほせん

斬
熱
相
跡
汗
化
禁
禁
任
志
天
邊
く
き
う
た
薛
小
せん
う
じ
沐
浴
を
せ
て。
相
跡

ひき食ふもひまむ。ちる極方へゆきを酒としまつけう。あまくみ
多く能とまうるか。と隠す御たり。と御船是
までがよどもうす。一休和尚。いのやうふらひよ。ときと
ありうちうふ。そもとまぐら坊や。あまくとあさく笑けれ
休まつめさうび。いとよつまへ隠とぞねども。にようりまがせん
むすうさうみづ。隠隠とくひみあすと。あさみづべはももと
むすあ。食ひぬとあさみづべりよと。なまくら
りそ難ひけとく。そもとまがせ達。くにちく
えさんを。隠隠と速。百遍遍ふにて。おとすはれの。画像と
えりくよ。衣冠わよと。餘りゆゑ。なれども。にようこころを知りて
義等大悟。うくよがうわのによう。身を制じて。あまく
くいざる權の勢と。さうふせんきうと。作ればほんとまと
うて。まともな作り。通じやとにと聞く。ゆきうち

まを一休へ生いきいきて魚と食くしてあちへ出でで。その魚をまち
りとのとく生いきいきと。波中よりつまはりとやせよと。商人
きうてきうけまふ一休かくく出でで。波中の邊べふをまれと
アモアサられ主ぬしを離はなふ

ま
まちの日ひの日ひ。さうねの不ふう。宋宋のものと食くと
ひてを供それとれ魚とれ。あ中なかふかどきしもく
四聲よせいの四聲よせいごんづふに出来できまちを

左支さしの天下あひだ老おれ一休大だい祿師ろくし

とをち見る。波中なみの旅人是これとて。うそうまとうが本ほんとく人ひとり
けとど。すまうばひし。おうことくともう。心こころく山さん自じ給き
そがれとえりとと下さきてはよま。せぎや人ひと見えわして。時代
のきうるよせよとて。あるもあらぬえーのえざむ。あの日の東ひがと
海うみを。門門あふ市いちを。あれえりうきとあらままで。びよろく
海うみ中なかを織おりゆ。その被は不ふうりしふ。大きひふ。うづと
うづと魚と魚と。料理りょうりと。のきいの不ふう不ふ揚あてすけ。一休出
きひて。の魚とひと食くよひとまひて。あちんぎりふ食くひて喝くと
のきひて。あちんまく目めとあさきなどまくへば。波中なみのくんどよ。山さん自じ給き
せり居ゐく。生うる魚とをく出でくふ。今いまやくと遊あそふ。あらむく
あり。のきひける。各かくもぐのは出でく。種たねふ。いつもよ。一きふ。よぎ
よた出でて見みせやさんとて。種たねふ。葉はす。けくちれそくふ。よみ
せ。是ぜ相あふ及およ。よ下くだる人ひときもとつぶ。さてもかどけ。ちは坊ぼうと無むく。ま
因いんへかく。よ下くだる人ひときもとつぶ。さてもかどけ。ちは坊ぼうと無むく。ま
生うき。海うみふかどりう。あら。とき。一きふ。種たねふ。叶はす。けくちれそくふ。よみ
も。海うみふかどりう。人の金かなふいさんと。あらだきうと。ひて。あらんが。あら
うと。海うみふかどりう。あら。とき。一きふ。種たねふ。叶はす。けくちれそくふ。よみ
人ひとあら。ふ。まがつきて。金かなをもがんせぬ。うえづまえ
りきうりーと。なう

作不言卷

三十五

天下月といひて、夜、軍とさざけて、あらゆうつうに見えず
うつうとんぬはねといひゆくおうえうれい葉が御のまみに碑で
かくふれに兵備法とあバおぐやとをうり伝じるがよ。
方わの理とすまんといひ。おれがさればきみとしよべ

或人和あへまおおや和あれ西あり。徳のゆのゆちうそのちあの男
ナサク。和尚さ多く。おもひて。病中。本宿。今月うみを仕す
和尚さ多く。おもひて。病中。本宿。今月うみを仕す
中ふ流布。侍て。おひき。何事も。おもひ。せられ。今。世のふき
度うれとりて。あうひい。もう何とぞり。一休さうめーさくべうきね
どりもんとる。

外の山ふ あきのぎな 伯耆の大せん

あこごきん ひゑいざん 駿河の塔 天狗の巣

ふそく きよの巣窟 大樹やね 貴之が亭

かづき。お壺。おひうちや。おののうづき。筋の一本。せんじよ。
きて。おきさきや。お刀。こまよ。こう。お家。ふと。波のひしり安
あいのうづふ。月。うの年の糸。の糸。さんすへえと。むき
むき。れうびんかのあたま。糸のうひ。おきらむ。ひも。うち
あひまでうり。とりひも。あひうり。とく。とく。とく。とく。
一衣。まつわ。和尚さ多く。をと。まの。すと。と。ある。一休。さのこ
うと。一休。おげり。うき。おき。おき。一休の礼。とりひも。と
り。と。おき。

かく。おもとく。とも。寝食

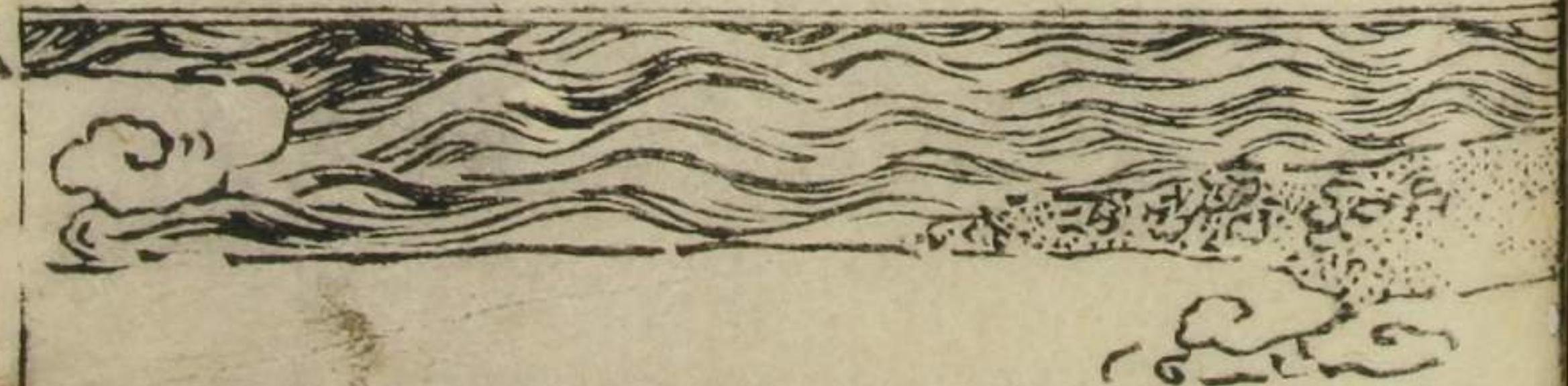
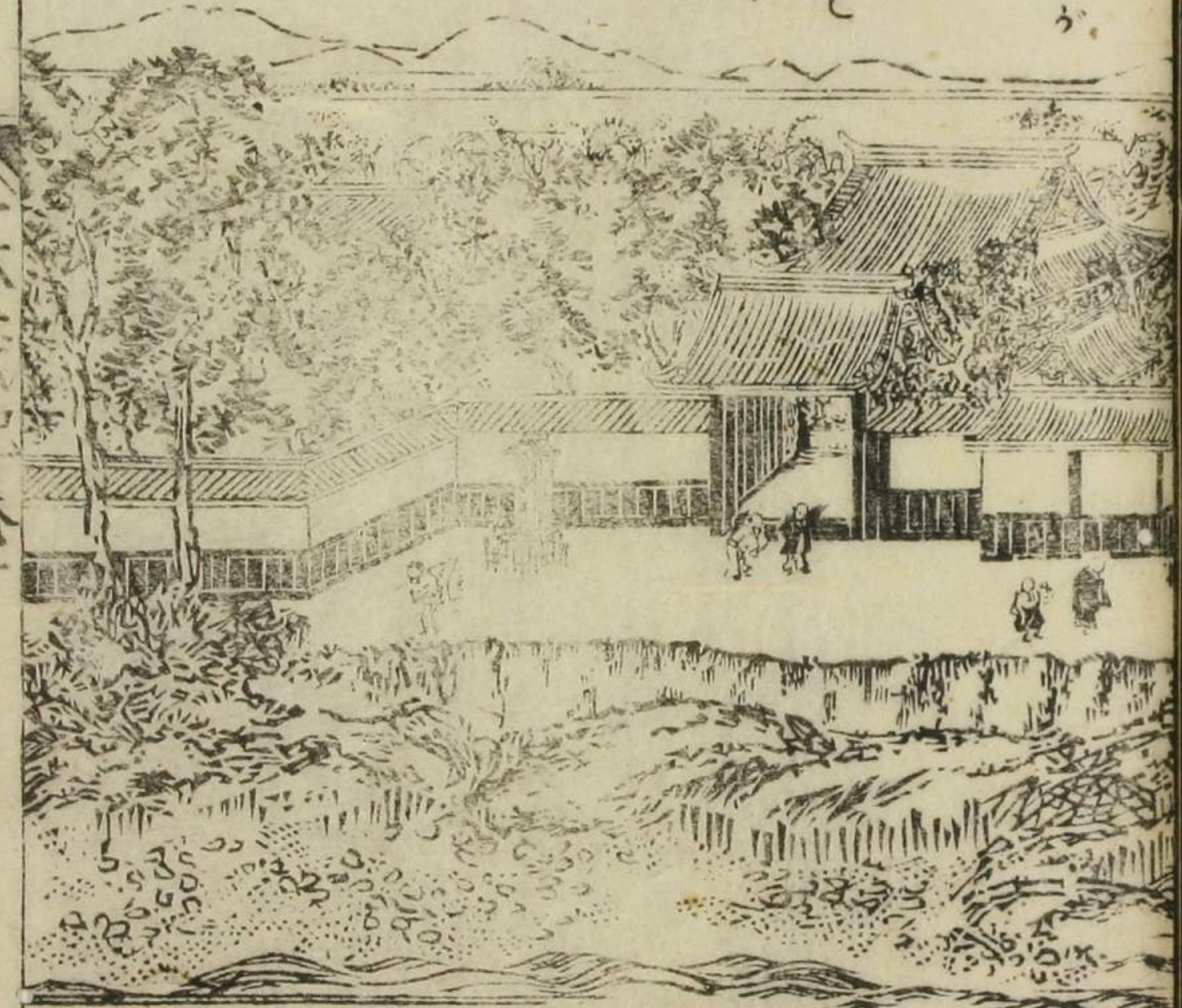
くもく。ゆうふ。あうゆ。か

くらひて是と通ひ。かく。うと。ま
まき。人。一休和尚へ。あねゆき。さん。う。の。おと。や。おと。おと。おと。
まみ。あき。う。おと。おと。おと。おと。おと。おと。おと。おと。おと。
作ら。う。おと。おと。あ。ま。ぞ。金剛の正体。とり。おと。おと。おと。おと。

作ら。う。おと。おと。あ。ま。ぞ。金剛の正体。おと。おと。おと。おと。

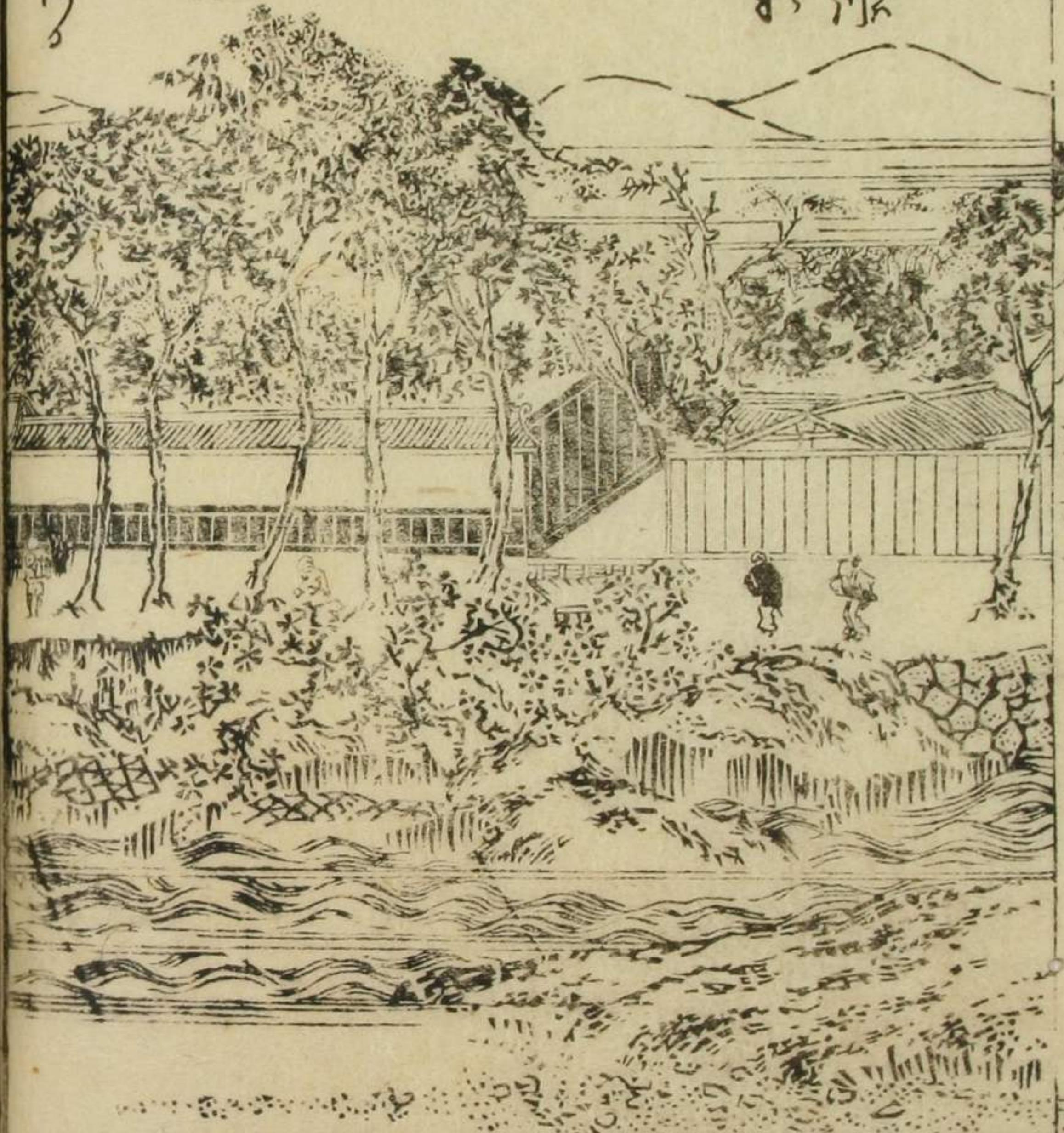
そよひてあくべし。す初にまづとひて金印を
作るわざあるが、あづきうとや。和あかうさうきうとや。いや
さうのうふてへり。金印のふ前とやへもあつて月ふゆふゆ
ふゆともまび。大ふゆ焼き。切てゆきれす。あふゆぬまびをふゆ
潔す。かゝてはまきのうとらへてえねをのとれふあくびてえ
りのうとひく。ひものまでこひらへきのうとれんが
きくべとく。まきうのうふてつる。あうきト。さ
うべんがぬきうとてせうが。門のふうきう又えうてく。はねねま
と今ちく。くまよ。さんざのふ前。まくと。門あふてそくと金印を
りぞや。そよひてはく。あくべし。よねむまば。底とまくすりのう
まとあつてよふゆかく見く。月ふゆふゆとまば。えふゆ
けをも切てもきを煮てもうしても。えねうきのうとふりくを
ねゆのとよひよよひて。いこうもあらりのうそいと。もまんがわふ
りくとくかモー

まきの
さうひと
ざると
さうが



きり
さう
み
ゆ

清東
川
様



ありがさきはえんふおりて、私がさつのあくとうけとまづれ、大切
と伝ふと。一通の後、對と應ふよりやうがめうりをうどく、
りよれいをすうり、徳ありて、大をかきのあ面川もれびとをのゆうぞ
ふつわう、お供ちがみ、ある不よの氣のせきの大とさきあわせ、そなまくま
をのやう食と、考へ全のととじて、りは、トさいつか、被あとども、大切
とゆよとさへゆき、ひとよりあう、家のみれや十数日、且時のろう
と、葵うるのやと、ばよぎのひのやと、引くと、やぐがや、も大ふちがひき
まくら、圓ト穴くさとくて、作かきと、あるハ又生とすと、金根とつて、や
りうると、是やとくと、あるハ又生とすと、金根とつて、や
三ヶ月をきて、のもう、我すよちとあく、おはいつ、かく、
とがあう、それづひふ、取よかく、一も、熟ひひの羽ひやく、ゆへく、
どく、く、ゆく、せうれう、をまの、羽ひ、然うもえやく、めぐら、因黒をじ
むく、ひ益々、外不どみゆく、様不どふ、轍ふも、因ふ、
きく、この、熟生、とが、太熟、大熟の、とくも、あふも、も、仁れ、大熟、大熟の
きく、うち、されば、の、金下とどると、別ふいま、あうひく、
つひく、も、とある不とみ、ニセのむくひ、とつ、とく、あく
きく、をまし、あく、あく、あく、あく、あく、
触で、少すら人見一く。

163
物事の見えざるつれざるさゝがうら
を不思議ふもまことあくまく
とあきをすまへば。人のものもあらず。おもひ事のあつま
先にゆんぐの聲よりてかきこざるは也。如今の世
化現。身みどり。みる一風よ。歎びたまゆる。が一入のや
あひのゆとりうて。こ人ともよきよきうて。えざりつむきうきうきの氣
とちつべふ。ゆきりよのと用いて。軽々と。よきよきわざとを
の繩かまく。ゆきうきうきの氣をもる人むと。ときらひゆく

今日の日も余の口ふ事よ

さうや。もううふあきまうきすうと。おもらうと二人のから
又うちかひき男あり。あく一休かあへまうぐうたくまわる。かあ
ひりのとつるをびふをかうきんぎんきん。わすよをかんかんせられよ
と。作らうけおきてやうむんむん仕立。あれくふまくすぎて
多くんきうふがまがうふのうまひもきくまくまくまくまくまく
りくづりの本うてそまくづく面ふかまもどどをきうけりと。お抜みて
くんかん仕立や和あまこまひて、云ゆく。それへくるきんかんのふ
ねやすらみ。うきくもきくすときとおれべうれきすときとのぎひい
ふ。おきうけうけに支りぬ。おらがかまもまきとむく。まくはまくとそくを
そそのおひと。おき仕りうきと。おきいううきれてハ。ひうたう
めふうあせんざん。さう不どよ。もかまもまきとまきとまきと
おきて。千つケ葉べ。それのむとげのうき人の面くかすまきとまき
うきうる麻のう生ありのよあべびとくふねれすいきす。おうと
くと。心人ともううべ。それ隠とりよじううもんち後のひよ

卷之二

つもりへもあそとよだより。支拂のうすひ夕とゆき。朝は春雲とひるくす
されば、空穂れゆどようむくとらぐべ。後ゆまくまづくのむくやもひ
ゆくせんゆのむくゆく。ほんのりゆくのゆくゆく。人情のゆくゆくあぐん
ゆくゆくゆくゆく。ゆくゆくあぐん
ゆくゆくゆくゆく。ゆくゆくあぐん

かねて十二をもううの事。女の葉つゝを居るが。俄ふひまく。繫ふ
りりきうとまく。一休あく。かうくまうよ。にまへば。にまへば。院をひまく。



と和為相あいえてもひのけ。妻女と引かくよねともひうへば。今ちふ
翁老の事うそとふらせと作つくて。後あとひよりをすれい。
何とやんがのまきとあをきがどうきうらあせいろ。たなびくとくもかず
り。をまゆげきくとまゆきとがる。一休いつしゅうぎふわがめられが蟹の
えびと蟹かにとどうそとえまくべ。そつ務むざふのまうとひき。えはま
けは蟹かにふかとまそとづくざうをあざされと。和為わいあるとまくはがく
は蟹かにとまく。も蟹かにとほじき務む院いんの功ご徳とくようくあまの金かなと
くまくらう。ねアそよりとひよのわぐさくす
さて爰あそふ一休いつしゅう因縁いんえんの坐おき史しみまれとき。後あと日承うけ取とりれ
毎日まいにちとひまひ来きまへて。さゑうげとひまられば。がまくらそつめか
りともとあん人ひとよ出で令めいすまうべ。傍そば人ひととひまひとまく。わくよひうそ年としや
蟹かにとば。蟹かに蟹かにがまくとあこまひと。物ものをそくはんに觸ふれとのと作つくら
らまくら。とねと先まへて山さん勢せいもれもようあひ。蟹かにはまかくとと
きうと。とれの魚うおと入いく。掛かもせばりとまくはいふとまくは

医師やされトクル。小宿いふもよし。不審きはれと。これよりヤ
けろ。あるとき日取氣もれり。あつまう。ばるやみ樹もひくを多
く。あらわの病とふそく。あきに傍のゆきされば。や無事どてきえ
て。が、もひづが、ひきより。あんと。かすれけ。が。の。人多
く。あくすと。あらば。おじきぬり。や。ひく。びそうふよきよ。の
め。の。い。部二人。まくと。そと。向ひ。け。が。続と。名さ。あ。ぐ。あ。う。が
人多。わ。あれ。ば。あ。ど。が。か。く。ま。が。な。ど。う。山。意。と。と。ざ。ら。れ。ぬ。り。
あ。く。く。べ。と。れ。ゆ。く。云。合。て。ひ。そ。つ。よ。二。人。あ。う。う。一。休。出。舍。ひ。方。山
の。わ。ぎ。す。き。そ。そ。一人。中。坐。う。は。冬。す。氣。の。山。療。治。み。ても。心。肺。い。難。い
み。か。く。く。す。と。医。師。名。や。き。す。平。生。あ。う。ち。づ。く。向。と。こ。う。あ。う。く
見。て。せ。り。よ。う。り。て。あ。せ。ん。と。ら。も。ち。つ。て。や。う。る。一。休。い。う。ふ。も。う。き。
ま。う。う。心。而。を。セ。ふ。や。ば。よ。い。の。と。う。か。ま。ぐ。き。は。日。暮。氣。こ。び。て。きて。う。の
ま。う。う。と。ま。う。い。う。の。と。う。ん。を。緑。茶。あ。ハ。便。食。

詩卷一

うるを絞とどまつ。參ひ日ひのすくにアガハヒトヘミ酒漬き。かきくと
えべとうみぐく。系るくうく。ふかみとくとて。もううやそれとあがめと
みのびぎく。一キスミテマフサハ。門外ホセトモヒテ。がのく
寝伏ふて、ひもをきくまへまへバ。隠寺らが今えぐくとてかのく
うう。林内萬葉。ヤクシムセモくの強く。すんとひよ。そくとまく
引もすみ。彼三人よ。まくまく。とくまく。びゆをまく。まくせまく。門
外もすり。聲をまく。とくまく。ひも。りとせぐと。のをとまく
も。彼多ひまくと。アキラカ。まく。

本來の面同様がまちをぐく
ひきもくそくさうじゑとこく

かどりふらをうけたもむろうまれ。まくよあくびときひゆい
画ふらう。あふきさめくわがまくわども。うとうちの
よやうかくまくら

とあくまでもおもての事は、
僕の爲めに心地とひきを教わるが、
つきておもれど。うきのよきと見てや
のよきふまくひつき。ほよひづくむか
多く、おとせんげくあくのたどくえんぐ
ぎくすふりておくる。ゆりひくみ難看ふらひ。そんじて云々院み休かずけく。
被坊主のやき。おとオのよきとくさ
り女のあくとくさくとくせんふへのやくらく。ともううづりとあ
ふとくよ。うとひておきのやくふ。不動故うとくの院をておとせん
ゆうう、弱れたりふらみき難看ふ二年。もねりが今いよいびのゆもおそれ
色の意よとふ又吹拂へえりふ。三月のものもとしゆまじふ。又秋の
月の院をもひつきり。おとせんげくやうんすすま

の仕事さとへくらう。二重ふたじゅうのぎよ邊へんへす。お業わざの種たねを燃やしきれ今いまか
の仕事さとは院いんちとてまよまよあく
一休いつきゅうと院いん二に人ひと同ともして、あとで、ねむりねむりをす。
えそ。櫻さくらの花はな室むろ中なかうて、あくと、不ふきんきん。さうとも、ふみみうち
よ。まともも、さきかとうかとうあくそ大だい難なんいわねば。何なんううふりううう
と、さとあふ。底そこひいて、ありうがるどねのうち、人のよこす。あまうほふ
ちキちトドとれうと底そこが雨あめぬうべ。一休いつきゅうは、もふりうきうきを
ことううう。とく、ひうううかりうきうきうまれば、そ、佩つるふも、がりう
の妻めのベや。あ、ありうのまのベやと、ううう御ごふまうなるのう。而よりう
きも、足あしと、うえき

大坂

東

林書行發

都

山山丁和団須椀小山須出秋河
口寄子泉田原 城原雲田屋内屋
屋屋屋屋屋屋林屋寺萬太右兵
藤清平市嘉伊伊新佐茂兵衛
兵兵兵兵兵兵次
衛七衛衛七八衛衛衛郎門衛

